特集

名古屋市立大学病院 - アレルギー疾患医療拠点病院の 5 年間の活動と診療のトピックス

新 実 彰 男*

内 容 紹 介

愛知県アレルギー疾患医療拠点病院である名古屋市立大学病院の活動について，病院全体としての診療実績（2019 年のもの）と，各科の活動については呼吸器・アレルギー内科の診療・研究実績を中心に紹介する。

は じ め に

名古屋市立大学病院は，

・一般社団法人日本アレルギー学会の認定教育施設であること

・内科，小児科，皮膚科，眼科，耳鼻いんこう科領域の診療科が全て設置され，その医師が常勤していること，または，愛知県における小児アレルギー疾患医療の中心的な役割を担っていること

・アレルギー疾患に関する専門的な知識と技能を有する薬剤師，看護師，管理栄養士等が配置されていること

という愛知県アレルギー疾患医療拠点病院設置要綱を全てみたし，2018 年の制度設立以来拠点病院として参画している。

Key words
アレルギー診療，名古屋市立大学病院，アレルギー疾患医療拠点病院

* Akio Niimi：名古屋市立大学大学院 医学研究科 呼吸器・免疫アレルギー内科学分野 教授

2023 年 5 月 1 日現在で，著者が所属する内科（呼吸器・アレルギー内科）は，日本アレルギー学会員 16 名，うち専門医 5 名（うち指導医 2 名）を擁している。これに対して，その他の診療科は小児科が会員 1 名，うち専門医 1 名（うち指導医 1 名），皮膚科が会員 5 名であり，当院では医師の配置がやや内科に偏っている状況である。勿論，上記設置要綱にあるように，内科以外の 4 診療科の全てで基本領域の専門医が在籍し，日本アレルギー学会員・専門医のほか，日本小児アレルギー学会・日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会・日本鼻科学会・日本皮膚免疫アレルギー学会などの，関連学会の会員を含む常勤医がアレルギー診療を行っている。しかし医師の配置状況から，本稿では内科の活動を中心に報告させていただくことを最初にお断りしておく。

Ⅰ．当院の診療実績

厚生労働行政推進調査事業費補助金（免疫・アレルギー疾患政策研究事業）「都道府県アレルギー疾患医療拠点病院の機能評価指標に関する研究」（研究代表者 海老澤元宏）において，2019 年 1 月～12 月における施設の診療実績調査が行われた。その際に回答したデータ（全診療科の実績の統合）を，一部修正して表に示す（**表 1**）。

1．呼吸器･アレルギー内科の活動状況

(1) 人材育成

2014 年 4 月 1 日，名古屋市立大学病院薬剤部，

表１　名古屋市立大学病院の診療実績(期間：2019年１月～12月)

（１）治療実績

		成人	小児
ア．紹介受入れ患者数(人)	気管支喘息	150	36
	食物アレルギー	3	5
	アトピー性皮膚炎	106	20
	アレルギー性皮膚疾患 (蕁麻疹，接触皮膚炎，接触蕁麻疹，ラテックスアレルギー等)	55	6
	アレルギー性鼻炎	353	13
	アレルギー性眼疾患	52	1
	アナフィラキシー	7	0
	薬物アレルギー･薬疹	0	0
	金属アレルギー	0	—
	消化管アレルギー関連疾患 (好酸球性消化管疾患)	0	0
イ．外来のべ受診患者数(人)		成人	小児
	気管支喘息	4,510	145
	食物アレルギー	21	28
	アトピー性皮膚炎	310	166
	アレルギー性皮膚疾患 (蕁麻疹，接触皮膚炎，接触蕁麻疹，ラテックスアレルギー等)	242	27
	アレルギー性鼻炎	988	122
	アレルギー性眼疾患	286	29
	アナフィラキシー	32	4
	薬物アレルギー･薬疹	0	0
	金属アレルギー	0	—
	消化管アレルギー関連疾患 (好酸球性消化管疾患)	0	0
ウ．入院のべ患者数(人)		成人	小児
	気管支喘息	57	31
	好酸球性多発血管炎性肉芽腫症	4	0
	アレルギー性気管支肺真菌症	5	0
	食物アレルギー	3	4
	アトピー性皮膚炎	3	0
	アナフィラキシー	12	1
エ．生物学的製剤 および 分子標的薬	オマリズマブ(ゾレア®皮下注)	30	
	メポリズマブ(ヌーカラ®皮下注)	11	
	ベンラリズマブ(ファセンラ®皮下注)	14	
	デュピルマブ(デュピクセント®皮下注)	28	
	バリシチニブ(オルミエント®錠)	12	
オ．アレルゲン免疫療法(皮下)実施患者数(人)	ダニ　治療用ダニアレルゲンエキス皮下注「トリイ」	0	
	スギ　治療用標準化アレルゲンエキス皮下注「トリイ」スギ花粉	4	
	その他	3	

カ．アレルゲン免疫療法（舌下）実施数	ダニ＊　＊ミティキュア® ダニ舌下錠／アシテア® ダニ舌下錠	6
	スギ＊　＊シダキュア® スギ花粉舌下錠／シダトレン® スギ花粉舌下液	16
キ．エピペン® 処方患者数（人）	0.3mg	30
	0.15mg	14
ク．皮膚科光線療法		388
ケ．気管支熱形成術		6
コ．鼻腔形態改善手術		29
サ．鼻漏改善手術		2
シ．アレルギー性眼疾患に関連した白内障・網膜剥離・緑内障の手術		14

（2）検査実績

		成人	小児
ア．検査概数：①実施していない ②年 1 件以上 ③月 1 件以上 ④月 10 件以上	プリックテスト（prick-to-prick test を含む）	④	③
	パッチテスト	④	③
	肺機能検査　（スパイロ）	④	③
	呼気 NO 検査	④	①
	呼吸抵抗測定	④	③
	気道可逆性試験	④	②
	気道過敏性検査	④	②
	抗原吸入誘発試験	④	②
	食物経口負荷試験	①	①
	運動誘発試験	①	①
	薬物負荷試験	①	①
	涙液中総 IgE 定性	①	①
	鼻汁中好酸球検査	③	②
イ．検査の実施件数		成人	小児
	・プリックテスト（prick-to-prick test を含む） ・パッチテスト （注）プリックテストとパッチテストは診療報酬点数上は同項目であるため，区別できない	172	4
	肺機能検査　（スパイロ）	6,638	84
	呼気 NO 検査	638	0
	呼吸抵抗測定	429	43
	食物経口負荷試験	0	0
	運動誘発試験	0	0
	薬物負荷試験	0	0
	涙液中総 IgE 定性	0	0
	鼻汁中好酸球検査	12	1

呼吸器・アレルギー内科，名古屋市薬剤師会が共同で”吸入指導ネットワーク”を設立した。当科からは竹村昌也助教(現 地域医療教育研究センター 准教授)が中心となって参画した。

活動内容は，以下のとおりである。

・名古屋市保険薬局薬剤師を対象とする講習会を年2回定期的に開催し，講義によって吸入薬の理論や吸入治療の基礎知識・最新情報を共有するとともに，プラセボ吸入器やテスターを参加者全員に配布してのロールプレイ形式での吸入の実技実習を行っている。
・吸入指導マイスター制度を設けている。講習会にて所定の講義・実習を受けた者は，「吸入指導マイスター」と認定され，認定書，マイスターバッジが渡されてマイスターリストに登録される(マイスターは更新制で，2年間有効)。
・吸入治療に関する情報共有ツール(薬剤師 - 患者 - 医師)として，吸入指示書，吸入デバイスの使用方法説明書(Q&A付き)，吸入手技チェックシートを含めたお薬手帳を活用している。

その他，喘息・慢性咳嗽の診療に関する講演を，勤務医・開業医，薬剤師などを対象にして定期的に行なっている。

(2)患者及び行政への助言・指導

名古屋市公害保健福祉課による，名古屋市在住の公害認定患者の転地療養事業(年1回秋に行われる2泊3日の短期旅行)への付き添い(患者さんの診察および喘息に関する講話)に，2008年から毎年協力している。また，2018年から愛知県公害健康被害認定審査会の会長を著者が務めており，毎月の公害健康被害者(気管支喘息・慢性気管支炎・肺気腫)の認定更新会議に当科からの委員と共に参加している。名古屋市の公害認定患者の認定・認定更新指導にも別の委員が参加している。

(3)診療・研究の取組

アレルギー疾患全般に幅広く対応しているが，特に重症難治性喘息患者と難治性慢性咳嗽の専門的評価と診断，最新治療に力を入れて取り組んでいる。外来診療が主体であるが，喘息増悪などの入院例にも救急科との連携の下で対応している。

主な研究テーマは，

・重症難治性喘息の病態・フェノタイプ研究[1]，
・生物学的製剤[2]
・気管支熱形成術による治療[3]
・難治性慢性咳嗽の病態・鑑別診断・治療法解明[4]，
・新規治療薬の臨床試験の主導[5]
・喘息合併慢性副鼻腔炎の病態と治療[6]
・喘息及び咳受容体感受性亢進と胃食道逆流症・機能性消化管疾患の関連[7]

などである。生物学的製剤治療に加えて，気管支熱形成術(気管支鏡を用いて気管支に熱を加えるアブレーション治療)を，局所麻酔では困難な患者では麻酔科の協力の下で全身麻酔下に施行するなどして全国有数の症例数を蓄積し，成果を挙げている。

耳鼻咽喉科の鈴木元彦准教授(現　名古屋市立大学医学部附属みどり市民病院耳鼻咽喉科教授)とは早くから協力体制を築き，重症喘息と高頻度に合併する好酸球性副鼻腔炎の両者を，2科の連携により包括的に管理する体制を確立して，共同研究でも成果を挙げてきた。喘息・慢性咳嗽に関する多施設共同研究にも多数参加している。

当科の診療・研究成果が評価を受けて，著者は「日本アレルギー学会喘息予防・管理ガイドライン(JGL) 2021」[8]の部会長や，「アレルギー総合ガイドライン(JAGL) 2022」成人喘息パートの編集・執筆責任者に任命され，ガイドライン作成に尽力した。JGL2024においても，著者が作成ワーキンググループ副委員長，田尻智子講師・金光禎寛講師がシステマティック・レビュー (SR)チームの委員として作成作業に参画している。咳嗽に関しても，日本呼吸器学会「咳嗽・喀痰の診療ガイドライン 2024」において，著者が咳嗽部門委員長，金光が事務局として参画している。第73回日本アレルギー学会学術大会(2024年10月京都にて開催予定)の大会長を著者が拝命している。

Ⅱ．その他の診療科の活動状況（診療科間の連携を含めて）

小児科では，野村孝泰講師を中心に，病診連携の強化による地域の小児アレルギー診療体制の構築，移行期・思春期喘息患者の小児科から内科へのスムースな移行も取り組んでいる。食物アレルギー罹患児に経口免疫療法を導入している。人材育成では，院内外の教職員，看護師，管理栄養士，乳児院職員，保健師を対象に，アトピー性皮膚炎の管理やスキンケアの指導法，食物アレルギー児への対応，経口負荷試験の実情などについて定期的な講習会・講義を行なっている。研究では，食物アレルギー，アレルゲン特異的免疫療法に関する臨床研究[9]，動物モデルを用いたアレルギー疾患の病態解明に成果を挙げている。

皮膚科では，アトピー性皮膚炎の教育入院を10日間のクリニカルパスに従って施行し，治療を行うとともに，患者に対してはアレルギー疾患の知識の確認，薬剤の使用方法については薬剤部，また食事については栄養科といった多職種との連携を含め，あらゆる側面からの治療のバックアップを図っている。またアトピー性皮膚炎の臨床試験への参加，症例導入を積極的に行なっている。内科・小児科と皮膚科の間で食物アレルギー，金属アレルギー患者におけるプリックテスト，パッチテスト施行についての協力体制を強化している。プリックテスト施行時は1泊2日の入院で，麻酔科と連携を行い，手術室にて検査を行っている。光線過敏症を検査するための専門外来も設置している。

耳鼻咽喉科では，先にも述べたように，内科との協力体制の下で上・下気道アレルギー疾患の包括的診療に取り組んでいる。研究では咽喉頭逆流症の治療に関する臨床研究[10]，アレルギー鼻炎の病態モデルなどに取り組んでいる。

おわりに

名古屋市立大学病院のアレルギー診療，研究の実態について，呼吸器・アレルギー内科の活動を中心に報告した。今後は各診療科のアレルギー学会員及び専門医が増加し，当院のアレルギー診療の更なる発展，ひいては愛知県に貢献できることを期待して稿を終える。

利益相反

本論文に関して，筆者が開示すべき利益相反はない。

文　献

1) Kanemitsu Y, et al：Increased capsaicin sensitivity in patients with severe asthma is associated with worse clinical outcom. Am J Respir Crit Care Med 2020；201：1068-1077.
2) Tajiri T, et al：Specific IgE response and omalizumab responsiveness in severe allergic asthma. J Asthma Allergy 2023；16：149-157.
3) Nishiyama H , et al：Bronchial thermoplasty improves cough hypersensitivity and cough in severe asthmatics. Respir Med 2023；216：107303.
4) Fukumitsu K , et al：Tiotropium attenuates refractory cough and capsaicin cough reflex sensitivity in patients with asthma. J Allergy Clin Immunol Pract 2018；6：1613-20.e2.
5) Niimi A, et al：Randomised trial of the P2X3 receptor antagonist sivopixant for refractory chronic cough. Eur Respir J 2022；59：2100725.
6) Kurokawa R, et al：Nasal polyp eosinophilia and FeNO may predict asthma symptoms development after endoscopic sinus surgery in CRS patients without asthma. J Asthma 2022；59：1139-1147.
7) Ito K, et al：Functional gastrointestinal disorders are associated with capsaicin cough sensitivity in severe asthma. Allergol Int 2023；72：271-278.
8) 一般社団法人日本アレルギー学会 . 喘息予防・管理ガイドライン 2021. 東京：協和企画；2021.
9) Tanida H ,et al：House dust mite SLIT-tablet is well tolerated in pediatric patients with controlled asthma. Asian Pac J Allergy Immunol. 2021 Jul 11. Online ahead of print.
10) Suzuki M, et al：Proton pump inhibitor ameliorates taste disturbance among patients with laryngopharyngeal reflux：A Randomized Controlled Study. Tohoku J Exp Med. 2019；247：19-25.